

音の散歩路

～万葉集に見る音の風景～

桜蔭学園・元講師
日本文化生涯学習振興会21・講師
古典文学サークルを多数主宰・指導
藝林短歌会、サキクサ短歌会、各会員

谷萩 礼子



万葉集4,516首の中の音に関する歌は、古今集や新古今集に比べると多い。それは万葉集には、題詠より実体験に基づく歌や叙景歌が多いことからもうなずける。音は動物や鳥や虫の鳴き声、自然の音に大きく分けられるが、動物としては、鹿の鳴き声が秋の風物詩として圧倒的に多く、他に蛙（かはず）、馬、狐などが詠まれている。鳥は霍公鳥（ほととぎす）が150首以上に詠まれ、ついで雁、鶯、鶴（たづ）、鴨、鶏（かけ）、千鳥、雲雀（ひばり）、雉、烏、鳴（しぎ）など多くの種類が詠まれている。自然の音としては川音、瀬音、波音、羽音などかすかなものから、雷鳴までが詠まれている。

本稿は前半では鳥の声をとり上げ万葉人がどう聞いていたかを述べ、後半では風の音や鳥の鳴き声から大伴家持の自然への思いと歌からわかる人生を考えてみたい。

和歌の世界では四季の歌のうち、春、秋が多く詠まれ、夏、冬は少ない。この傾向は万葉集だけでなく、平安時代以降の勅撰集では一層顕著になる。しかし万葉集では、特に鳥に関しては初夏の訪れを告げる霍公鳥が群を抜いて多い。そのうち数首をあげる。

①古に恋ふらむ鳥は霍公鳥けだしや鳴きし我が思へること（巻2・112 額田王）

[あなたが昔を恋しく思って鳴くとおっしゃる鳥は霍公鳥でしょう。おそらく私が昔

を偲ぶように鳴いたのでは]

②恋ひ死なば恋ひも死ねとや霍公鳥もの思ふ
ときに来鳴き響（とよ）むる（巻15・3780
中臣宅守）

[恋ひ死ぬなら死んでしまえと霍公鳥は私が物思いをしているときに来て鳴き声を響かせるよ]

③霍公鳥来鳴き響（とよ）もす卯の花の共
にや来しと間はましものを（巻8・1472 石
上堅魚）

[霍公鳥が来て鳴き声を響かせる。卯の花の咲くのと一緒に来たのかと聞きたいなあ]

④橘のにはへる香かも霍公鳥鳴く夜の雨に移
ろひぬらむ（巻17・3916 大伴家持）

[橘の花の香りは霍公鳥が鳴く夜の雨に消えてしまうのだろう]

⑤鶯の 生卵（かひこ）の中に 霍公鳥 独
り生まれて 己（な）が父に 似ては鳴か
ず 己が母に 似ては鳴かず 卯の花の
咲きたる野辺ゆ 飛びかけり 来鳴き響も
し 橘の 花を居散らし 終日（ひねもす）
に 鳴けど聞きよし 幣（まひ）はせむ
遠くな行きそ わが屋戸の 花橘に 住み
渡れ鳥（巻9・1755 高橋虫麻呂）

[鶯の卵の中に霍公鳥はひとり生まれて、お前の父にも似ては鳴かないし、母にも似

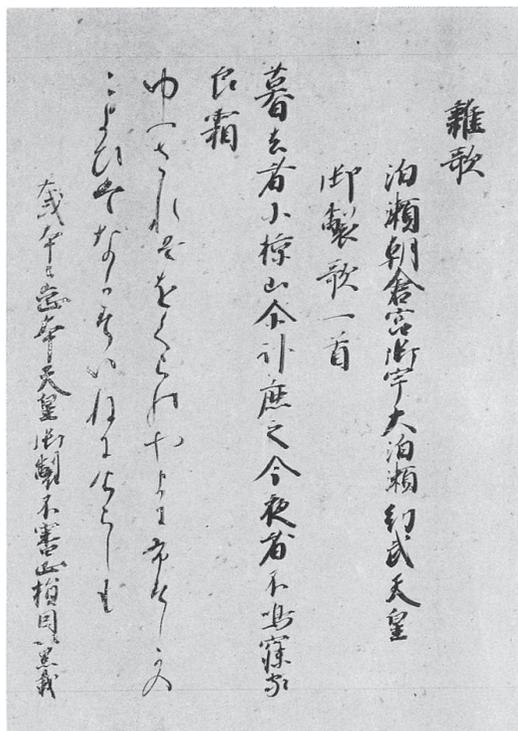


写真1 藍紙本万葉集「夕されば小椋の山に鳴く鹿は今宵は鳴かず寝(い)ねにけらしも」(参考文献³⁾から引用)

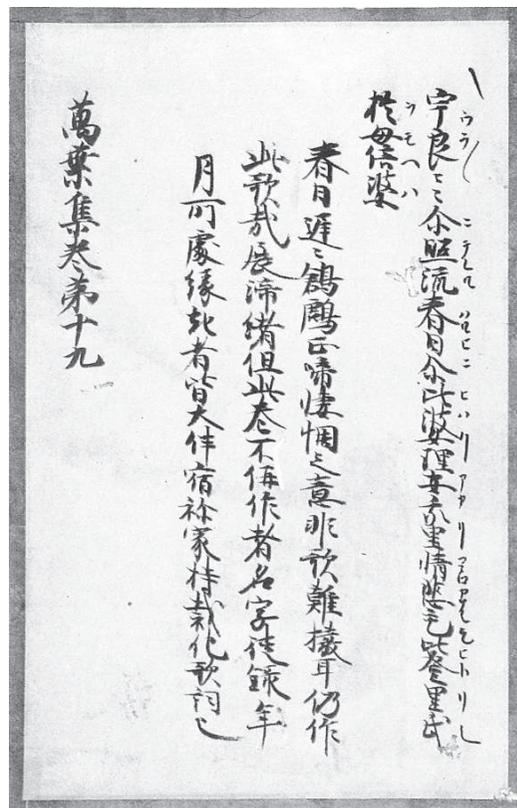


写真2 春日本万葉集「うらうらに照れる春日に雲雀あがり情(こころ)悲しもひとりし思へば」(参考文献³⁾から引用)

ては鳴かない。卯の花の咲いている野辺から飛びかけり来て鳴き声を響かせ、橘の花を散らせて一日中鳴いているが、聞いていて快い。贈り物をするから遠くへ行かないでおくれ。私の家の花橘に居続けなさい霍公鳥よ]

- ⑥信濃なる須賀の荒野に霍公鳥鳴く声聞けば時過ぎにけり(巻14・3352 東歌)

[信濃にある須賀の荒野に鳴く霍公鳥の鳴く声を聞くと農耕の時期が過ぎてしまったとわかるよ]

- ①の歌から霍公鳥は昔を偲ばせる鳥であることがわかる。これは中国の伝説にある「蜀の望帝が

位を叢帝に譲ったが、その妻に恋をしたため隠棲した。死ぬと魂は鳥となり、初夏には農耕を始める季節になったと告げるため鳴いた」という故事に基づく。②からは鳴き声が離れている妻や恋人への思いをかきたてることがわかる。③・④のように霍公鳥が鳴くときに卯の花や橘が咲くので花とともに数多く詠まれている。⑤は伝説や伝承を詠んだ長歌に才を発揮した高橋虫麻呂の作であるが、霍公鳥の習性をよく知っていて、しかも鳴き声がすばらしいといっている。⑥は蜀の望帝の故事をふまえて、「農耕に適した時期は過ぎてしまった」と訳されていたが、「トキスギニケリ」という音は霍公鳥の鳴

き声をうつしたという説がある。私には野山を「トッキョキョカキョク」のように聞こえる声で鳴きながら姿も見せず飛び去ってしまうイメージが強いが、カ（ガ）行音とタ行音からなるという共通性を考えると、狐の鳴き声「コン」（来む）とともに歌の言葉で鳴き声を表したユニークなものといえよう。

しかし霍公鳥の鳴き声はさほどきれいとはいえないもので、万葉人、特に後期の歌人たちが夢中になって「霍公鳥の遅く鳴くのを恨む」と言い、「夜中まで起きていたからこその他の人より早く声を聞いた」と友人に得意げに和歌を送るほど待ち望んでいるのは不思議である。

次に多いのは雁であるが鶯と量的に大差はなく、霍公鳥に比べれば半数以下である。雁は秋の到来を告げるものとして詠まれる。

⑦今朝の朝明け雁が音聞きつ春日山黄葉（もみち）にけらし我が情（こころ）いたし（巻8・1513 穂積皇子）

〔今朝の夜明けに雁の声を聞いた。春日山はもう黄葉しているだろう。思えばせつないことよ〕

⑧秋の田の穂田を雁が音聞（くら）けくに夜のはどろにも鳴きわたるかも（巻8・1539 聖武天皇）

〔秋の穂の出た田の上を雁はまだ暗い夜明け方に鳴き渡っていくよ〕

⑨妹を思ひ寝（い）の寝らえぬに暁の朝霧隠

り雁が音ぞ鳴く（巻15・3665 遣新羅使人）

〔京に残してきた妻を思って寝られずにいると明け方の朝霧の中で雁の声が聞こえることよ〕

⑦のように明け方に雁は鳴くが、その声の聞こえるところは萩や浅茅や葛などの黄葉（万葉集では黄葉が使われ、紅葉は使われていない）するところであった。また⑧のように稲の穂がでるときでもある。⑨のように雁の声に妻や恋人を思って寝ざめがちな暁に鳴き渡るの、物思いをさそう鳥でもあったが、万葉人は雁の声を待ちかねていたようだ。

鶯も多く詠まれているが第3位で、ようやく春の鳥の登場である。

⑩我が宿の梅の下枝に遊びつつ鶯鳴くも散らまく惜しみ（巻5・842 高氏海人）

〔私の家の梅の下枝に鶯が遊びながら鳴いているよ。花の散るのを惜しんで〕

⑪うち霧らし雪は降りつつしかすがに吾家の園に鶯鳴くも（巻8・1441 大伴家持）

〔いちめんに曇って雪が降り続けているが、我が家の庭には鶯が鳴いているよ〕

鶯は現代と同じく春を告げる鳥であり、霞がかり、⑩のように梅の花が咲き、柳が萌え、⑪のように時には雪もちらつくころに庭先に鳴き始める。鶯に次いで、鶴が多く詠まれていて、万葉時代には、人里近くでも鶴が鳴いていたことがわかる。また雲雀は3首であるが、万

葉集の後期にのみ詠まれている。

- ⑫雲雀あがる春辺とさやになりぬれば都も見
えず霞たなびく（巻20・4434 大伴家持）
[雲雀があがる春のころにはっきりなつた
ので、都もみえないぐらいに霞がたなびい
ているよ]

さて万葉集の編者と考えられる大伴家持の歌は圧倒的に多く、全歌数の1割を占めているが、柿本人麻呂や山部赤人に比べ、完成度ですぐれているとはされていない。しかし、皇族への挽歌、歴史的な回顧の歌、叙景歌、私的な恋の歌などあらゆるジャンルに、また歌体に壮大なスケールの作品を残した人麻呂とも、清新な叙景

歌でアララギ派の島木赤彦から「おのずから天地の寂寥相に合している」と評された赤人ともちがう、繊細で鋭敏な感覚で憂愁の情を歌い上げた。巻19の巻末の3首に見られるような新たな境地を開いた歌人として、私は家持を高く評価したい。

大伴氏は古来武門の名族として、壬申の乱でも大活躍した。祖父安麻呂も父旅人も大納言にまでなっているが、藤原氏の台頭によって、活躍の場が狭められてきた。旅人は大宰帥として都から遠ざけられ、家持も20代後半で国守として越中へ赴いている。家持にとっては左遷のように感じられたかも知れないが、越中の自然は新しい歌境を開いてくれた。奈良の都では見ら



写真3 霍公鳥（ほととぎす）



写真4 雲雀（ひばり）

れない雪を頂く立山を望み、能登の海の荒々しさと美しさに感動した5年間を過ごしたが、都から離れた寂しさを歌で慰めてもいた時期でもあった。33才で少納言として帰京して2年後の歌に次の3首がある。この3首は天平勝宝5年2月23日と25日に作られている。

⑬春の野に霞がたなびきうら悲しこの夕影に鶯鳴くも（巻19・4290 大伴家持）

[春の野に霞がたなびいても心は悲しい。この夕方の光の中で鶯が鳴いていることだ]

⑭わが屋戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕べかも（同・4291）

[私の家のわずかな竹群を吹き過ぎる風の音のかすかなこの夕暮れよ]

⑮うらうらに照れる春日に雲雀上がり情（こころ）悲しもひとりし思へば（同・4292）

[うららかに照っている春の日に雲雀が上がり鳴いているが、私の心は悲しい。ひとりもの思いをしていると]

この3首の後には漢文の左注がついている。それを書き下し文に直すと

春日遅々として、鶺鴒（そうこう）正に鳴く。悽惻（せいちょう）の意（こころ）は歌にあらずは撥（はら）ひ難し。よりてこの歌を作り、もちて締（むすぼほ）れし緒（こころ）を展（の）ぶ。[春の日はうららかに照り、雲雀がその中で鳴く。憂愁の情は歌でなくて

は除きがたい。それでこの歌を作り、鬱屈した心を晴らすのだ]

この歌を作ったとき、家持の心は糸がもつれて解けないようにわだかまっていた。歌うことよってのみ心を晴れやかにできた、というのである。ようやく都に帰ってきた家持であるが、目標として学んできた人麻呂や赤人の時代とは状況が異なり、和歌は正式の場で歌われることなく、漢詩がとってかわっていた。それは聖武天皇亡きあとの宮中で、藤原仲麻呂の権力のもと、唐風にすべてが変えられていたためであった。帰京した時は元号さえ唐をまねた「天平勝宝」という4字元号となっている。大伴氏の衰退は目をおおうばかりで、もはや祖父や父の代のような活躍は望めなかった。その状況で、家持は歌に沈潜していく。その耳に聞こえてきたのは⑬の鶯であるが、霞がたなびく春が来た明るさがよけい寂しさをかきたてるのだ。また傷ついた心は⑭の竹群を吹くかすかな風の音にも反応する。そして⑮のように、春の光あふれるときに雲雀が鳴くという、のどけさの中にいるからこそ、よけいに心が沈んでいくのだ。

ここで風がどのように詠まれてきたかを見てみたい。「朝風」「秋風」など複合語を含めて風詠は105首あるが、

⑯宇治間山朝風寒し旅にして衣貸すべき妹もあらなくに（巻1・75 長屋王）

[宇治間山の朝の風はさむい。旅なので衣

を貸してくれるはずの妻もいないのに]

- ⑰東風（あゆ）の風いたく吹くらし奈呉の海人（あま）の釣する小舟漕ぎ隠る見ゆ（巻17・4017 大伴家持）

[東風がひどく吹いているらしい。奈呉の海人が釣りをしている小舟が波に隠れて見える]

のように風を音で感じてはいない。寒さや荒々しさを感じさせるものとして歌われていて、吹く風が木々にふれてたてる音を詠んだものは、唯一

- ⑱一つ松幾世か経ぬる吹く風の音の清きは年深みかも（巻6・1042 市原王）

[この一本松はここでどれほど年を経たのだろう。松を吹く風の音が清らかなのは年がたっているからであろう]

がある。市原王は天智天皇の子、志貴皇子のひ孫に当たる人で、家持の同時代を生きた人である。⑭の歌は⑰の影響を多少うけたかもしれないが、⑰は宴席での寿歌であり、家持のように、かすかな音に耳を傾け、自分をみつめる境地にいたってはいない。

家持の歌について、折口信夫が「調子は大きめで堂々として、古風なよさを保持している一方、内容は近代的な鋭い感覚、しかも鋭いとは言いがたいしづけさの中に働いている」と言っている。私は家持の感覚の鋭さには感嘆するが、近代的と言い切ることは大いに疑問である。近

代に通じるというのは、近代人の傲慢さで、家持から近代人が学んだのではないだろうか。自然と一体化しようとした家持であるが、天平時代は人麻呂のように自然は常に身近にあるのではなく、奈良の都という都市住民である家持は自然がのどかで光にあふれているからこそ、自分は同化できない悲しみを感じたのだ。そのきっかけが鶯であり、竹群を吹く風の音であり、雲雀の声であった。凋落していく大伴家の氏上として家持の聞いた音は春の明るさのなかでますます心を沈潜させていく。家持の絶唱であるこの3首は人間存在の悲しみを表していると言っていいだろう。

参考文献

- 1) 「万葉集 全訳注原文付（一）～（四）」中西進著（講談社文庫）。
- 2) 「万葉集事典」中西進編（講談社文庫）。
- 3) 「日本古典文学全集 万葉集（一）～（四）」（小学館）。
- 4) 「万葉集総索引」正宗敦夫編（平凡社）。
- 5) 「万葉集の鑑賞および其の批評」島木赤彦著（講談社学術文庫）。
- 6) 「ちんちん千鳥の鳴く声は」山口仲美著（講談社学術文庫）。

（監修 一般財団法人 カワイサウンド技術・音楽振興財団 理事 谷萩隆嗣）